



Compete in beauty: World of Ukiyo-e paintings from the HIKARU MUSEUM collection

浮世絵は木版による作品が大半を占めますが、絵師が直接筆をとり、絹や紙のうえに一筆一筆丁寧に描かれた肉筆浮世絵にも、近年高い関心が寄せられています。

本展示会は、これまで大々的に公開されることがなかった光ミュージアム（岐阜県高山市）所蔵の肉筆浮世絵の名品を、初めて一挙にご紹介するものです。コレクションのなかから美人画を中心に111点を厳選し、浮世絵史における各時代の代表絵師のほか、上方や地方で活躍した絵師たちの作品をお楽しみいただけます。肉筆浮世絵ならではの、しなやかで優美な魅力をご堪能ください。

勝川春章(美人と通磨)(部分) 天明7~8年(1787-88)頃 絹本着色一軸

肉筆浮世絵の世界

2021 **7.3** 土 — **9.5** 日

休館日/7月12日(月)、19日(月)、26日(月)、8月2日(月)、10日(火)、23日(月)、30日(月)
 開館時間/9:00~17:00(入場は16:30まで)
 観覧料/一般1,100(900)円、70歳以上・学生900(700)円
 ※()は前売りおよび20名以上の団体料金。
 ※18歳以下の方および高等学校、中等教育学校、特別支援学校の生徒は無料。
 ※身体障害者手帳、療育手帳、戦傷病者手帳、精神障害者保健福祉手帳の提示者とその介護者(1名)は無料。
 ※前売券は、ローソンチケット(Lコード62374)、セブンチケットでお求めになれます。
 ※割引券は県内各プレイガイドおよび道の駅、旅館等観光施設に設置しています。
 主催/肉筆浮世絵展萩実行委員会(山口県立萩美術館・浦上記念館、毎日新聞社、tysテレビ山口)
 後援/山口県教育委員会、萩市、萩市教育委員会
 協力/エフエム山口 特別協力/光ミュージアム 企画協力/アートシステム
 監修/鈴木浩平(美術史家)、故・永田生慈(美術史家・北齋研究者)

イベントのご案内

ギャラリー・ツアー

(学芸員による作品解説) **要観覧券**

日時/毎週日曜日
 11:00~12:00
 会場/本館2階展示室
 定員/20名(申込先着順)

申込方法/
 電話(0838-24-2400)にて、参加希望日・参加者全員の氏名・年齢、代表者の日中の連絡先をお知らせください。

※新型コロナウイルス感染状況によっては、中止・変更となる場合がございます。

オーストリア、ウィーン近郊にたたずむ古城ロースドルフ城では、城主ピアッティ家により古伊万里を中心とした陶磁器が多数コレクションされ、城内を美しく飾る調度品として大切に伝えられてきました。ところが、第二次世界大戦の戦禍によりその多くが破壊されてしまいました。ピアッティ家はそうした悲劇により破壊された陶片を破棄せず、城内の一室に陶片をあつめ、平和への願いも込めてインスタレーション展示を行い一般公開してきました。本展は、国内にある古伊万里の名品とともに、破壊された陶片を含むロースドルフ城所蔵の日本、中国、西洋の陶磁器コレクションを海外において初公開するものです。日本の修復技術による復元作品も展示し「再生」にも焦点を当て、波乱にとんだロースドルフ城コレクションの全貌を紹介します。



1.色絵草花文輪花皿 有田窯 1670-1680年代 佐賀県立九州陶磁文化館蔵 / 2.白磁大壺(組み上げ修復)マイセン窯 20世紀初頭 ロースドルフ城蔵 / 3.色絵松竹梅鶴文八角大皿(修復) 有田窯 1700-1720年代 ロースドルフ城蔵 / 4.五彩花文皿(修復)景德鎮窯 18世紀前半 ロースドルフ城蔵 / 5.色絵唐獅子牡丹文亀甲透影瓶(部分修復) 有田窯 1700-1730年代 ロースドルフ城蔵 / 6.五彩・色絵花卉文碗皿(破片) 景德鎮窯・有田窯 18世紀前半 ロースドルフ城蔵

The Destruction and Rebirth of Exported Old-Imari

The Tragedy of Loosdorf Castle

海を渡った古伊万里 ~ウィーン、ロースドルフ城の悲劇~

2021年9月18日[土]~11月23日[火・祝]
 休館日=毎週月曜日(ただし9月20日、10月4日、11月1日は開館)、9月21日[火]
 開館時間=9:00~17:00(入場は16:30まで)
 観覧料=一般1,500円、学生1,300円、70歳以上1,200円、18歳以下無料

主催=海を渡った古伊万里展萩実行委員会(山口県立萩美術館・浦上記念館、朝日新聞社、yab山口朝日放送) 後援=山口県教育委員会、萩市、萩市教育委員会、オーストリア大使館/オーストリア文化フォーラム、日澳協会 特別協力=ロースドルフ城ピアッティ家、一般社団法人古伊万里再生プロジェクト、佐賀県立九州陶磁文化館、エフエム山口 企画協力=株式会社キュレーターズ

イベントのご案内

*詳細については、後日当館HPや本展示会チラシでご案内いたします。
 *新型コロナウイルス感染状況によっては、中止・変更となる場合がございます。

○記念講演会 「ウィーン、ロースドルフ城 陶片は何を語るのか」
 講師:荒川正明氏(学習院大学教授・本展監修者)
 日時:9月25日[土] 13:30~15:00
 会場:本館講座室(40席)
 料金等:聴講無料、要事前申込

○特別対談 「陶磁器修復の世界」
 講師:嶺山浩司氏(修復家)×荒川正明氏
 日時:9月26日[日] 13:30~15:00
 会場:本館講座室(40席)
 料金等:聴講無料、要事前申込

○ギャラリー・ツアー (担当学芸員による展示解説)
 日時:10月3日[日]、10月17日[日]、11月7日[日]、11月21日[日]
 いずれも11:00~12:00
 場所:本館2階展示室
 申込等:要事前予約、要観覧券、定員20名



和田 的 CONTRAST —光と陰—

2021. 4. 3 ~ 2022. 3. 27



対極の和解へ

—— 和田的の白いかたち

岐阜県現代陶芸美術館館長
石崎 泰之

《Energy Explosion》(部分) 2020年

すべての色の光が混ざり合うと白になる。

茶室に和田的のかたち(インсталレーション)を覗いたときにそそられた、このちょっとした感興から話を始めよう。

2019年に六本木の国立新美術館で催された「21st DOMANI・明日展 平成の終わりに」で、かれの近作をまとめて観る機会があった。そのときの展示構成は、ホワイト・キューブに明暗の階調のみでかたちの量感と緊張感を際立たせたミニマルなものだった。このたびの展示構成もじつに明快なのだが、2019年の静謐な雰囲気とは違って変まって饒舌の感がある。茶室という空間との関係性において展示作品が複層的に想像力を喚起するのだろう。先に小結じみたことを言わせてもらおうと、空間のイメージと作品の意味とが不可分に融合して、エソテリック(奥義的)なのである。

現代風四畳半茶室の中央に置かれた作品は、《Energy Explosion》(エネルギーの爆発)と名付けられた無釉磁胎に銀彩を施した蓋物である。その渋いしろがねの照り返しを、作家は蒼空の遙か彼方で起きた超新星爆発のような強烈な輝きに見立てたのだろう。その光源からの放たれる強烈な光を、六方へ等距離に配したつや消し白磁の〈白器〉シリーズ6点で象徴させている。なるほど、ここに加法混色の白色、すなわちすべての色の光の融合としての白という見立てが成り立つ。

展示ではこれらの他に、床の間には「一期」の掛軸を背後に〈白器〉の《太陽》、水屋の手前には同じく《蹲》が置かれ、さらに茶室の空間的外延であるガラス窓を隔てたバルコニーには、FRP樹脂でネコの柔らかい足指のかたちに造られ、青・黄・赤・白・黒の五種の色に塗り分けられた《ふわふわ5!》が、こちらも放射状に置かれている。

ところで冒頭のような観者が抱いたささやかな衝動は、

この《ふわふわ5!》の「五色」に光の多種多様を連想させられただけではない。そもそも茶室の建築には、草木や土や布・紙といった自然由来の素材色が内包されているのである。

茶の湯の専用空間として茶室は、16世紀後半の安土桃山時代に深化した侘数寄の理念によって創り出された。侘数寄は、「きわめて贅沢な貧弱さであり、また、きわめて貧弱な贅沢さである」(ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』)と記されるように、虚飾を削ぎ落とした生の内面性を視覚化するという激しい対極の行動原理にもとづく表現性を重視して、「枯れかじけ寒い



《白器蹲》2020年

冬木」(『山上宗二記』、以下の引用句も同じ。)と比喻されるほど、個我の美意識を先鋭的に実践した千利休が大成した。

利休は、自身にとって侘数寄の師であった武野紹鷗が唱えた「一座建立」をも嫌って、「一期一度」の侘茶へとその在り方をも覆し、従来の開放的で歓楽的な茶の湯の空間を否定した。現在その激しい革新的気質の一端は、かれの手になることも伝えられる二畳茶室の待庵にたずねることができる。これは戦場での仮設的な囲いという方式で建てられたといわれる草庵式の茶室だが、その超俗性に満足した利休は以後自身が建てる侘茶の空間に多用したらしい。仮設ゆえに急造から



《ふわふわ5!》2011年 素材:FRP 茨城県陶芸美術館蔵

始まったこの草庵式茶室の構造は、天然材や古材など粗末な素材が好んで用いられ、それゆえに仕上げには格段の精妙さが求められるなど、その造作に緊張を孕んだ高次元の感覚的洗練が強く求められた。現代建築における茶室空間のイメージと構造も、この対極的思考から生まれた草庵式茶室に遡る。

さて、素材色が内包される茶室空間に配された和田の作品群〈白器〉は、いずれも天草石の粘土素材をロクロで肉厚に立ち上げた筒状の祖形をベースにして、彫刻刀で鋭く削り出され、やすりで丹念に研ぎ出されたかたちである。白無垢の素地面に現された清楚な肌合いには、茶室内部の反射光がやわらかに映り込み、磁胎ながらかすかな温かみを覚えさせる。このつや消しのうぶな質感をつねに意識しながらかれは自己をかたちに表現してきた。

かたちは素材に対する作り手自身の純粹感覚の投影である。だから、周囲のさまざまな色をも映り込ませる白いかたちには、かれの経験的自我的すべてが溶け込んでいると言い換えることもできるだろう。

ところで、前掲のイエズス会宣教師の記述を言い換えて、「多」と「一」や、「異」と「同」または「夜」と「昼」といった、同じように対極にはあるが別の価値観や概念からこの展示(インсталレーション)を眺めてみたとき、茶室空間に置かれた白いかたちのそれぞれが、たとえば前述の見立てと重なったりあるいは離れたりと、複雑ではあるが違った関係性へと置き換えられることに気づかされる。

和田のインсталレーション「CONTRAST—光と陰—」は、そうした対極を対極として保持しつつ、それらの矛盾を相互に結合ないし融合して統一するという試みに映る。ここには、すべてが白光へと集束していくような、対極の和解への意思が潜んでいる。

いのうえやすじ こうせんが けいしょうしゃ 井上安治 — 光線画の継承者

展示室1
浮世絵

会期 2021年 8月3日(火) → 9月5日(日)

井上安治(1864～1889)は、小林清親(1847～1915)の弟子として、師が得意とした“光線画”を継承しました。明治13年(1880)、清親の後押しをうけながら17歳でデビューを果たし、翌年には代表作である「東京真画名所図解」の連作を開始します。それは四つ切判という写真や絵葉書にも似た小さなサイズの作品で、安治のみずみずしい感受性と相まって愛すべきシリーズとなりました。安治は病のために26歳の若さで夭逝しますが、清親が光線画の筆を止めた後も、人気に応じて光線画を晩年まで描き続けました。



《霊岸島高橋之景》横大判錦絵 明治14年(1881)

山口県の伝統工芸 I・II

展示室8
工芸

会期 I 2021年 9月14日(火) → 12月12日(日)

会期 II 2021年12月14日(火) → 2022年5月15日(日)

伝統工芸は、先人から受け継いだ工芸技術をもとに、いまでも進化を続けるものです。かつて、日常の器や調度品は、手仕事によって作られたもので成り立っていました。しかし、社会の近代化にともない、ものづくりの機械化が進み、現代ではどの工芸分野も存続が厳しくなっています。

しかし、歴史を重ね培われてきたわざには、未知数の可能性があります。ものの機能を高めることはもちろん、美的表現においても引き継がれたわざをベースにして自由度を高め、目にしたことのない感動を生み出し続けていると言っても過言ではありません。

山口県では、さまざまにある工芸のうち「萩焼」「赤間硯」のわざを無形文化財に指定し、保護しています。本展では、国指定重要無形文化財「彫金」保持者である山本晃(1944～)の作品も加え、県ゆかりの近現代作家による「萩焼」「赤間硯」の作品と2回にわたり展示し、この地域にしかない、卓越したわざを紹介します。



堀尾卓司《清》1970年代



三輪休和(十代三輪休雪)《秋茶碗》1974年頃



山本晃《接合二段箱「草叢」》1997年

開館25周年記念 館蔵名品選 I・II — ありがとう、浦上敏朗さん。

展示室1 展示室2
浮世絵 東洋陶磁

会期 I 2021年 9月14日(火) → 10月17日(日)

会期 II 2021年 10月19日(火) → 11月23日(火祝)

山口県立萩美術館・浦上記念館は、開館25周年を迎えました。これまで多くの方々にご来館いただき、ご支援を賜りましたことを心よりお礼申し上げます。

平成5年(1993)、山口県萩市出身の浦上敏朗氏(1926-2020)が、長年にわたり蒐集した陶磁器と浮世絵版画を中心としたコレクション(2300点余)を山口県に寄贈したことが契機となり、平成8年(1996)10月14日に開館しました。25周年を記念し、当館の歴史の礎となった浦上コレクションの名品を2回に分けてご覧いただけます。

陶磁器のコレクションは、中国陶磁と朝鮮陶磁がその中核をなしています。特に中国陶磁では、漢時代から唐時代までの人物・動物俑や三彩の器物、宋時代の白磁や青磁、そして明時代の赤絵や古染付などが特徴的です。そして朝鮮半島の作品では高麗時代の陰刻や象嵌青磁、李朝時代の粉青沙器や染付など、日本人の好みに合った作品を中心に収集されていますが、そこには浦上氏の美意識、鑑賞眼が強く反映されています。陶磁器研究家の長谷部楽爾氏は、「浦上コレクションの何よりの特徴は、ひとつひとつの作品に見どころがあり、必ず魅力があることである。(中略)それらは親しみ深い姿で静かに語りかけてくる友達のような感じさをする¹⁾」と評価しています。

本展ではI期に中国陶磁を、II期に朝鮮陶磁を紹介します。



葛飾北斎《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》横大判錦絵 天保2～5年(1831～1834)



青花月兔文栗鼠耳角扁壺 朝鮮時代・18～19世紀



鈴木春信《坐鋪八景 鏡台の秋月》 中判錦絵 明和3年(1766)頃

浮世絵版画のコレクションは、錦絵とよばれる多色摺の技法が完成した江戸時代中期から幕末、そして浮世絵が衰退を迎える明治期までを概観する内容となっています。可憐な少年少女の姿と繊細な色彩で甘美な世界を描いた鈴木春信、東洋のビーナスと称される八頭身美人の鳥居清長、女性の内面まで写し描いた喜多川歌麿、役者の個性をありのままに描いた東洲斎写楽とそのライバルであった歌川豊国、風景画の先駆者、葛飾北斎と歌川広重など、名だたる巨匠の作品が網羅されています。また浦上氏が早くから評価していた歌川国芳の作品が充実している点も特徴です。

本展ではI期に、春信から寛政期の歌麿まで、II期は北斎や広重が活躍した天保期から明治期の小林清親までの作品を紹介します。

浦上氏は名誉館長として当館の開館後も美術館を支え、また作品の寄贈を継続し、コレクションの充実を図ってこられました。昨年8月15日に94歳で逝去されました。生前に書かれた文章には、自分がこれまで受けてきた恩を返すため、コレクションを多くの人々と分かち合うことを決意したことが記されています²⁾。私たちはその遺志を受け継ぎ、これからもみなさんと感動を分かち合う美術館でありたいと思います。そして美しい芸術にふれた時に訪れる穏やかな安らぎや心躍るような喜びを教えてください。浦上さん、素敵な贈り物をありがとうございました。



灰陶加彩駱駝 北魏時代・6世紀



東洲斎写楽(三代目市川高麗蔵の志賀大七) 大判錦絵 寛政6年(1794)



喜多川歌麿《難波屋おきた》 大判錦絵 寛政5年(1793)



藍三彩宝相華文三足盤 唐時代・8世紀

¹⁾『開館記念! [蒐集家 浦上敏朗の眼—館蔵名品展] 中国・朝鮮陶磁篇』山口県立萩美術館・浦上記念館 1996

²⁾浦上敏朗『或る美術コレクターの生活』平凡社 1996

令和2年度の新収蔵資料について

昨年度令和2年度の資料収集活動(資料の受贈)として、下表のとおり陶芸33件の資料を受贈しました。いずれの資料も、今後の当館における展示をはじめとする美術館活動において有効に活用させていただきたく予定です。

このたびの資料収集にあたりまして、貴重な資料を御寄贈くださいました皆様をはじめ、お世話になりました関係各位に心よりお礼申し上げます。

番号	作品名	制作者	質料	制作年	制作地	寸法 (cm)	寄贈者 (敬称略)
1	青花牡丹唐草文壺	不詳	陶磁	15～16世紀	ベトナム	高14.8 胴径22.8	浦上満
2	青花鳥文瓶	不詳	陶磁	15～16世紀	ベトナム	高31.7 胴径12.0 高台径10.2	浦上満
3	青花花文盤	不詳	陶磁	15～16世紀	ベトナム	高5.6 口径23.2 高台径15.4	浦上満
4	青花菊唐草文碗	不詳	陶磁	16世紀	ベトナム	高10.3 口径13.7 高台径7.2	浦上満
5	青花山水文合子	不詳	陶磁	15～16世紀	ベトナム	総高4.6 口径6.5	浦上満
6	青花花文合子	不詳	陶磁	15～16世紀	ベトナム	総高4.7 口径6.5	浦上満
7	五彩花卉文合子	不詳	陶磁	16世紀	ベトナム	総高5.3 口径7.0	浦上満
8	Untitled '88 - I	十三代 三輪休雪	陶磁	1988年	日本	高57.0 幅138.0	十三代 三輪休雪
9	萩練込秋桜図深鉢	大和保男	陶磁	2005年	日本	高8.5 径46.0	佐々木光治
10	萩子香合	大和保男	陶磁		日本	高5.0 幅8.2 奥行4.8	佐々木光治
11	萩丑香合	大和保男	陶磁		日本	高5.0 幅8.3 奥行5.0	佐々木光治
12	萩寅香合	大和保男	陶磁		日本	高5.5 幅9.0 奥行5.0	佐々木光治
13	萩卯香合	大和保男	陶磁		日本	高3.8 径6.2	佐々木光治
14	萩卯香合	大和保男	陶磁		日本	高4.5 径6.7	佐々木光治
15	萩巳香合	大和保男	陶磁		日本	高4.5 幅6.4 奥行5.9	佐々木光治
16	萩巳香合	大和保男	陶磁		日本	高4.5 径6.4	佐々木光治
17	萩焼午香合	大和保男	陶磁		日本	高6.5 幅8.0 奥行7.0	佐々木光治
18	萩申香合	大和保男	陶磁		日本	高5.6 径6.6	佐々木光治
19	萩酉香合	大和保男	陶磁		日本	高5.6 幅5.0 奥行5.2	佐々木光治
20	萩戌香合	大和保男	陶磁		日本	高6.0 幅5.5 奥行4.5	佐々木光治
21	萩戌香合	大和保男	陶磁		日本	高6.0 幅6.4 奥行4.0	佐々木光治
22	萩辰香合	大和保男	陶磁		日本	高4.2 径6.6	佐々木光治
23	萩亥香合	大和保男	陶磁		日本	高4.0 幅9.0 奥行4.5	佐々木光治
24	萩焼未香合	大和保男	陶磁		日本	高5.2 幅8.0 奥行4.5	佐々木光治
25	萩午香合	大和保男	陶磁		日本	高4.0 幅7.2 奥行4.7	佐々木光治
26	萩未香合	大和保男	陶磁		日本	高4.5 幅6.7 奥行5.2	佐々木光治
27	萩丑香合	大和保男	陶磁		日本	高5.8 幅7.2 奥行4.5	佐々木光治
28	萩辰香合	大和保男	陶磁		日本	高5.0 幅7.0 奥行4.7	佐々木光治
29	萩申香合	大和保男	陶磁		日本	高5.0 径7.0	佐々木光治
30	囲み取って賞でるXⅧ Subterranean Sanctuary in Hundred	松本ヒデオ	陶磁	2007年	日本	高90.0 幅200.0 奥行200.0	松本ヒデオ
31	五面瀑布図向月台	松本ヒデオ	陶磁	2017年	日本	高99.0 幅100.0 奥行100.0	松本ヒデオ
32	黒蜥蜴壺	止原理美	陶磁	2019年	日本	高45.0 胴径33.0	現在形の陶芸萩大賞展V実行委員会
33	彩色灰釉金彩茶盤	仲岡信人	陶磁	2019年	日本	高8.3 口径12.4	仲岡信人

受贈資料(一部)



1 《青花牡丹唐草文壺》
15～16世紀 ベトナム



2 《青花鳥文瓶》
15～16世紀 ベトナム



3 《青花花文盤》
15～16世紀 ベトナム



4 《青花菊唐草文碗》
16世紀 ベトナム



5 《青花山水文合子》
15～16世紀 ベトナム



7 《五彩花卉文合子》
16世紀 ベトナム



8 十三代 三輪休雪 《Untitled '88-I》
1988年



9 大和保男 《萩練込秋桜図深鉢》
2005年



30 松本ヒデオ 《囲み取って賞でるXⅧ Subterranean Sanctuary in Hundred》
2007年 撮影:永田陽



31 松本ヒデオ 《五面瀑布図向月台》
2017年 撮影:表恒匡



32 止原理美 《黒蜥蜴壺》
2019年



33 仲岡信人 《彩色灰釉金彩茶盤》
2019年